

日本史探究 第2回 授業の進め方とポイント

【第2回テーマとEQ】

天皇を中心とした古代国家の成立 ～天皇に権力が集中した律令国家～

【第2回の解説ポイント】

- ・各地に小国が乱立した時代から、それらの小国を従えた強力な国家の登場を理解する。
小国を従えた強力な国家同士がさらに対立・連合し、大和朝廷が登場することになる。
- ・より強力な権力者の登場が理解できる存在として、各地に広がる古墳の存在を知る。
- ・中国で成立した強力な中央集権国家の影響を受けて、豪族同士の争いが続いていた日本においても、安定した中央集権の国家体制が目指されるようになった。
- ・天皇中心の中央集権の政治体制を目指し様々な改革を進めた聖徳太子であったが、有力豪族であった蘇我氏の影響もあり、その改革は十分に果たすことができなかった。
- ・聖徳太子の死後、有力豪族である蘇我氏が独裁的な権力を握ったが、それに反発した中大兄皇子と中臣鎌足が大化の改新（乙巳の変）を起こし、再び天皇を中心とした政治体制が目指されるようになった。
- ・天皇を中心とした中央集権的な政治体制の完成が、律令国家体制である。

古墳時代においては、それまでに成立した各地の小国が次第にまとまり大きくなっていく中で強力な国家となり、それらがさらに拡大していく中で大和朝廷が登場することを理解したい。その権力の広がりや根拠の一つとして、各地の古墳の広がりや大きさの違いについて説明できれば理解が深まるのではないか。

そして、古代国家の成立後、有力者（豪族）同士の対立が続く中において、中国に成立した中央集権国家を参考に、天皇を中心とした中央集権の政治体制が目指されたことを理解する。その到達点が律令国家体制であり、全ての土地・人民が国家のもつとされる公地公民の制度が律令国家の基礎となったことを理解したい。

【書いてみよう： 律令国家ができるまでをまとめてみよう。】

例) 6～7世紀頃、有力な豪族同士の争いが続いていた日本では中央集権の国家体制が目指されるようになった。聖徳太子は様々な改革を進めて天皇中心の国家体制を整えようとしたが、その死後は蘇我氏が権力を握った。蘇我氏への反発から大化の改新（乙巳の変）が起こり、再び天皇中心の国家体制が目指されるようになり、大宝律令の制定により完成した。

（キーワード： 天皇 聖徳太子 蘇我氏 大化の改新（乙巳の変） 大宝律令）

【これまでに出された留学生からの質問】

・「天武天皇からは大君ではなく天皇と呼ぶようになったと聞きました。ですが、それ以前にも天皇がいたと思います。それ以前にも天皇は存在したのでしょうか。」

→大宝律令が出された時代に「天皇」という言葉があったといえるが、天武天皇の時代には「天皇」という称号が成立したのではとされている。それ以前の称号としては、埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣銘にある「大王」であったと考えられる。

・「前方後円墳は日本特有のものなのですか？朝鮮半島や中国にはないのですか？」

→韓国南部には、前方後円墳と類似する古墳が存在することが知られている。日本の前方後円墳にも様々な中国思想の影響が見られることから、それまでにあった墓制が大陸からの文化的影響を受けて成立したものではないかと考えられる。

【教材について】

歴Ⅰ-2 第Ⅰ回のテキスト(ルビなし・ルビあり・英訳・中国語訳)

重要語句には、黄色マーカーをつけ、□で囲ってあります。

地名・国名には下線がつけてあります。

人名には波線がつけてあります。

※地名や人名などの固有名詞は知らなければ理解できないものの代表格です。

とりあえず、それが地名である、または人名であるということがわかると、理解の手がかりになります。

英訳・中国語訳にも日本語の重要語句との対応がわかるよう、日本語(と読み方)が入れてあります。

歴Ⅰ-3 ワークシート

考えてみよう：冒頭にEQ(一番理解してほしいポイント)が提示してあります。

書いてみよう：末尾に、理解したことをアウトプットする欄があります。

生徒の日本語力により、母語で書いてもいいことにしましょう。

テキストを見ながら空欄を埋めていきます。

歴Ⅰ-4 ワークシート 答え入り

空欄に赤字で答えが入っています。

「書いてみよう」にシンプルな日本語で解答例が入っています。

母語で書いたのと見比べて、日本語の書き方を学ぶことができます。

歴Ⅰ-5 重要語句説明

重要語句の説明を、日本語と英語で示しました。

アプリなどを使って生徒の母語に翻訳する際は、英語の説明を使った方が正確な訳が出るようです。

歴Ⅰ-6 確認テスト

重要語句の確認、復習のため、語句と説明をペアにした問題形式のシートです。